

新刊  
紹介

*"I love my books as drinkers  
love their wine; The more I  
drink, the more they seem  
divine."*

といわなければならない。この仕事は、日本で最初のものであり、研究予算の少ない私学の事業としては、注目すべきものであり、作製者の苦心がしのばれる。

内容は全産業を五項目に分け、重要産業はさらに小項目にわけて露語で文献をあげ、日本訳を付して、文献の所在図書館を示し、全文献一五三八冊をあげている。さらに著者名索引と、担当者門脇彰君の解説がつけられている。

(O)  
現在わが国にはソ連研究の気運がとみに強まっているが、研究者の誰しもが逢着する最初の困難は、文献の不足である。しかし、それも所蔵図書館が全くわからないため、わが国に存在するのに、ないとされていく本もかなり多い。各図書館が、ロシア語文献目録をつくり公開してくれば、このような初歩的な悩みはたちどころに解決されるのだが、なかなかそれがなされない。

本書は、国会、神戸大、京大、同志社大の四図書館所蔵のソビエト産業の歴史と現状の研究に必要なロシア語文献を一、五五〇点収録した目録である。原語名のとこに書名の邦訳をつけ、所蔵先を明記するほか、

本文献の具体的作業を担当した門脇彰氏が、一二頁におよぶソビエト産業の発展を解説している。読者は、まずこの解説を研究の手引きとして読み、そののち自己のテーマを設定し、文献を検索して研究をおすすめることができよう。その意味では、ソビエト産業史研究の入門手引き書ともいえる体裁をとっている。

この種の文献としては、細かい所まで気を配って作られており、また同志社大人文科学研究所所蔵の貴重なマイクロ・フィルムについてその利用可能な点を明記している点など、研究者の一人としては有難い。資料を独占せず広く研究者に公開することはソ連研究の発展に欠かせないことだし、そのためには、各研究所、図書館がこの種の文献目録を今後続々と公開してもらいたいと思う。

(日本読書新聞 昭和40年2月1日)

大橋寛政(香里高校教諭編「あめにたから」  
盲人牧師大橋五男の生涯 私版、B6判一  
九四頁、非売)

昭和三十八年十一月二十三日、八十二才

同大人文科学研究所編「ソヴェト産業史文献  
目録」 東京・日本評論社、B5判八六頁、  
定価四〇〇円。

最近とみに日本の学界において、産業研究が盛んとなり、当大学でも人文研を中心として、京都産業や村落産業あるいは独占企業等の研究会が結集されている。人文研資料部はこのような状況に鑑みて、一昨年以來本書の完成を急いでいたが、従来研究者が異常な関心を示しながら、接近の方法を知らなかった国であるところの、ソヴェトを取あげたことは、誠に貢献の多いもの

六カ月で永眠した同志社校友宣教師の自叙伝を主とし遺詠、手稿、信徒門人らの回想を付録とした故人記念集で編者は故人の令嗣。

幼少のとき自らの過失で片手を失い盲となり、しかも幼時よりその逆境にひるまず、常に光明を見つめて己が進路を開拓してやまず、八十二年の生涯を神と共に莫進また莫進、勝利栄冠の生涯を貫いた記録は、明治・大正・昭和のわが国キリスト教界の一異彩であるのみならず、永く広く後進を奨励し感化するであらう。

口述を整理されたものであらうが、編者の整理宜しきを得、読みよく、読者を引ずって一気に読ませ、われわれの日々の努力の不足を痛く反省せしめる。記載中福音学館の一条は同志社史料中の薄弱な部分を補うものである。門人の追想も、清水安三氏の短文ながら痛快な思い出ほか各氏の二十六篇は何れも自叙伝を裏づけこれを補い、本篇に生彩を加えている。千五百部を印行し、教会・福祉施設等へ贈られた。逆境に在る多くの人々へのよろこびのおとずれである。

(T)

希望者には、郵送料六〇円同封のうえ申込めば頒布される。

オーテス・ケリー編「アダムズ家の人々——

アメリカ政治・文化の歴史——」大阪・創元社、B 6判二五三頁、定価四百五十円。

十七世紀初葉、イギリスの一農民ヘンリー・アダムズは沢山の子供をひきつれて開拓まもないマサチューセツのピューリタン植民地に移住してきた。百年後、彼の子孫は突如歴史の舞台に登場するのである。その後アダムズ家は、アメリカ史の上に数代にわたって指導的人物を輩出し、政治・外交・学問・文芸等の諸領域で大きな貢献をなし、比類ない名門となった。このアダムズ家の代表的な人々とは、アメリカ独立と合衆国の建設にそれぞれ功績のあったジョン・アダムズ（第二代大統領）その従兄弟サミュエル・アダムズを第一世代とし、ジョン・クインシー・アダムズ（モンロー大統領の時の国務長官、後に第六代大統領）を第二世代、チャールズ・フランシス・アダムズ（リンカーン大統領の時の駐英大使）を第三世代、その子、歴史家ヘンリー・アダムズとブルックス・アダムズを第四世代としている。本書は十人のアダムズ家の人々の生涯を通してアメリカの政治・文化の歴史を面白く描いている。読者は、アダムズたちに共通する民主主義をまもろうとする良心がさまざまなかたちで歴史の流れの中に現われるのを興味深く読みながら、いつのまにかアメリカ史の展開を自然にのみ込むことができる。このようなユニークな本がケリー教授を中心に組織された同志社、京大、東大をはじめとする研究者の共同研究の成果として出版されたことは意義深いことである。本書は、いろいろな面からアメリカを研究しようとする人々への入門書としても、また一般向の教養書としても面白い。

(S・O)

Masao Takenaka: Reconciliation and Renewal in Japan. Friendship prss. New York, 1957. a9判九五頁

日本における和解と革新とを題するこの英文九五ページの小冊子は一九五七年にニューヨークで出版された。だから、この欄で紹介するのにふさわしい新刊書とはい

いがたいが、日本のキリスト教の歴史と課題を紹介するものとして、こんにちの時点でも有益な書物である。

筆者竹中正夫氏は神学部教授で、キリスト教社会倫理を専攻するとともに、国際的な活動家でもある。内容は日本におけるプロテスタンティズムの宣教開始にはじまり、封建制度から明治近代国家への発達過程において、キリスト教が果たした役割として、教会・学校教育・社会事業などの実践活動をあげ、また初期の社会主義者におけるキリスト教の影響やキリスト教的社会主義の形成などの思想活動も記されている。さらに儒教や神道や国家主義との対決やキリスト教の平和思想と運動が述べられ、第二次世界大戦中の反省と少数者の抵抗の事実があげられ、戦後の再建の様相、そしてこんにちの対立する世界の和解と革新にはたすべきキリスト教の課題が説かれている。

従来のキリスト教史の著述には社会経済史的視点を欠くものが少なくないが、この本は簡潔ながら日本の近代史や世界のキリスト教の動きのなかで日本のキリスト教を浮

き彫りにしている。ただ戦後の日本に対するララやケアの物資援助が詳しく説明されているところなどは、やはりアメリカで出版されたためかという疑問がおこる。ともあれ、共産主義のほうが核爆発による人類全滅より怖ろしいと考えている人がすくなくないというアメリカの、とくにキリスト教界に対し、本書が目を開く役割をはたしてくれることを望む。

(笠原)

中条 毅(文学部教授)著「経営と労務の近代化―西陣近代化によせて―」京都、三和書房、A5判二一七頁、定価六五〇円

中条毅教授が、十年にわたる西陣産業の労務管理にかんする調査を、最近、三和書房から出版された。題名は「経営と労務の近代化」。私は労務管理も専門でなく、西陣労働者の生活についてもあまり知らないの

で、専門的書評はとんでもできない。ただ、労働問題と中小企業調査の研究者として簡単な書評をさせていただきます。これは中条教授の西陣産業にたいする愛情のうかがわれる書。まず、一九五四年の調査開始以来、一〇年にわたる、とりわけ一

九五六、六〇、六三年の三回にわたるアンケート調査の努力。また、西陣労働生活についての同書の各所に見られる簡潔ながらよく観察した描写、それから福利厚生施設、とりわけ生活管理指導を担う地域福祉センターの重視。これらは、じつくり調査した対象に対する愛情がにじみ出ている。そして、労働者の要求が五六年から六三年までの三回の調査の間にかなり顕著な変化を見せている結果も興味深い。賃上げの希望はなお強いが、その他に大小企業に共通して「福利厚生施設」が求められ、中小経営では「使用主の封建性打破」大経営では「労務管理全般の向上」「労働時間の短縮」「労働強化からの解放」などの要望が倍増しているのである。

西陣産業をよく知らない私などには、労働者の西陣企業に対する血縁、地縁の紐帯の特殊性を今少し知りたかったような気がする。

最後に、この調査時期こそ、正に経営と労務の近代化の時期であった。この過去となつた近代化の時期の調査記録として本書は貴重な意義を持つ。敗戦直後、経営の民

主化という言葉が普及した。また戦後資本主義の特徴として、モリス・ドップは、技術革新と、経済に対する国家介入をあげ

つゝ (M. Dobb, "Capitalism since the

First World War" in Science & Society, spring 1964) 近代化という場合には、三つの特質がある。一つは克服、脱皮すべ

き近代化的なものの存在。第二、克服・脱皮の目標は現代であり、すでに到達している社会や企業にとっては、近代化とは、現状肯定と現状維持である。第三、しかし、近代化、物的生産力の向上がやはり基本的柱となっており、そのための融資・国家補助の必要も考えられている。ドップの説も

実質的には妥当しよう。第一と第二の点から格差縮少が目標となろうし、生産・生活の合理的再編成も近代化では考えられる。しかしそこには成員全体の生活水準の向上のためという価値視点は明確でない。価値視点ぬきの近代化は体制の現状維持下の生産力の向上と再編成で、結局、資本蓄積のための合理的再編成、合理化に帰着しかねない。中条教授の場合は、西陣産業に対する愛情と労働問題に対する理解とが、自ら

価値視点を形成することによって、「近代化」論一般の持つ欠陥を免れた調査書となつたといえようか。(角田)

松好貞夫(校友・東京都立大名晋教授)著「関ヶ原役」東京・人物往来社・B6判二七〇頁、四三〇円。

著者には既に紹介した「天保の義民(岩波新書)のほか「太閤と百姓」「村の記録」(以上岩波新書)「北涯の悲劇」「金持大名(以上岩波新書)「北涯の悲劇」「金持大名(以上岩波新書)「北涯の悲劇」等、社会経済史の名著が近來続々出ているが、「関ヶ原」もその一つである。

関ヶ原の役は昔から天下分ケ目といわれた大内戦で、日本の政治勢力を一変し、中世に終止符を打ち近世の開幕を来たさせたものであったが、従来の説書の示すところはほとんどが戦史的なものか戦記物語りあるかいは政治的のものに終始し、社会経済史の立場からこれを分析したものは本書が始めてといつてよい。

著者が永年にわたって接した豊富な史料を、円熟した史観をもって自由に駆使しながら全篇をみごとに組み立てている。行文

も簡潔流麗、挿入写真も多く、高校生以上の読みものに適し、これから経済史の世界に入ろうとする学生にはその方法のよい教科書ともなる。

またこれを一般読書人の読物としてみるなら、確実な史料と正確な判断に立っているだけに真実から湧き出る面白さと示唆は小説家の英雄伝の及ぶところではなく、引用された史料は著者により随所に生き活きとして躍動させられている。著者が微笑しながら楽しんで興味深い史料を引用しつつ筆を進める姿さえ想像できるほど、著者と読者が一体となれる本である。(T)

